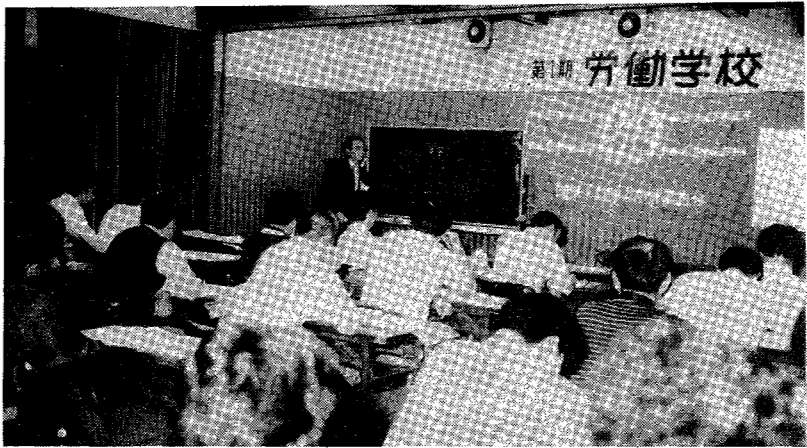


国家「戦争」との徹底した対決＝現代を生きるというこの意味

第7回労働学校開かる

東洋大学・竹内良夫教授が講演

動労千葉労働学校第7回講座は、10月13日、東洋大学・竹内良夫教授を招き、「現代国家と世界革命―戦争と革命の時代」をテーマに開講されました。受講生から提出された「報告・感想レポート」を掲載します。（編集委員会）



「歴史の教訓にしっかりと学べば、くじけることなく勝利への活路を拓いてゆける」……自らの信念をかけての竹内教授の講義には迫力がみなぎる。

の基本矛盾の爆発としての戦争か、それとも戦争によってしか延命できない帝国主義を打倒する革命か、という時代なのである。

一人ひとりが生き方をかけて「戦争」「国家」に対決すること

「現代」とはこのような時代なのだということをとらえ、「中曽根の反動に対決し、戦争に反対する生き方・思想を一人ひとりがうちかためることが大切である」こと、そして「帝国主義と対決し、政府の戦争政策に反対するたたかいを自分の生き方にかけて貫く」ことの重要性を、竹内講師は強調された。

その中でとくに「国家は階級支配の道具である」（議会も含めて）こと、その権力に反対することなしに闘いはないこと、そのために労働者

は農民との「労農同盟」に立つて、共通の敵＝ブルジョアジーの打倒のためにたたかうことが労働運動の重要な原則の一つであることがあげられた。

ついで竹内講師は「現代を資本主義の発生―発展―没落と階級闘争の歴史の中からあとづけ、考えていくこと」を強調された。現代世界が二つの世界大戦と、その後の分割支配（一九一九年のヴェルサイユ体制や一九四五五年のヤルタ協定など）の上になりたっていること。帝国主義とりわけアメリカ帝国主義の世界支配こそ諸悪の根源であり、帝国主義の「繁栄」は後進国の犠牲の上になりたっていることを明らかにされた。



現代は、戦争か革命かの時代

「現代国家と世界革命」というテーマは、動労千葉の「国鉄―三里塚を基軸に、反動・中曽根と対決する労働運動」路線と極めて密接な課題であると感じました。

私たちの生きている「現代」とはどういう時代なのか。

それは、資本主義がその最高の発展段階としての帝国主義段階をむかえつつも、その矛盾が人類の歴史のなかではじめて世界規模の戦争（第一次世界大戦）として爆発し、一方その中で、ロシアで歴史上はじめて社会主義革命が成功したことが出発点となっています。

現代とは、帝国主義が基軸でありつつも、部分的には、帝国主義が打倒され、社会主義が成立した（しかし、これはのちに「スターリン主義」として歪曲・変質され、世界革命をうらぎるものとなった―第4回講座を参照―）時代としてとらえることができる。つまり現代は、帝国主義

確信をもった動労千葉の路線＝労農連帯

講義を聴きながら、私たち労働者や労働運動は、こうした世界全体の動きや仕組をつねに考えつつ、帝国主義によって搾取され、収奪されている後進国・半植民地の問題や農業問題をとらえながら、帝国主義打倒にむかっていたかわなければならぬ、ことを痛感した。とりわけ、アジアで唯一の帝国主義国である日本の労働者が、自国帝国主義のアジア侵略と侵略戦争を阻止すること、そ

のような凶暴な体制を打倒すること

こそ、アジアの労働者人民のたたかいに真に応える道であることがはっきりとした。

今回の講座で、動労千葉の「国鉄―三里塚を基軸に、中曽根打倒へ」「一人ひとりが活動家に」という路線が本当に正しくて勝利できるものだということが実感できた。また、10・10三里塚五割決起貫徹の成果と意義もより一層鮮明になったと思う。この内容を生かして今後もがんばりたい。

ひまわり（寄稿）